The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	死の悪の生前説を擁護する
Author(s)	佐々木, 渉
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101595
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　佐々木　渉　）	
論文題名	死の悪の生前説を擁護する

論文内容の要旨

本論文は、「死は死の当人にとっていつ悪いのか」という分析哲学の死の哲学における主要な問題に取り組み、「死は生前において悪い」とする生前説（Priorism）を擁護した。その中で、本論文では、対立する立場を退けるとともに、以下の3つの主張を展開して、生前説の定式化を精緻化しつつ修正を加えた。1. 生前説は比較を用いない形で定式化されるべきである。2. 生前説の価値原子は「主体Sが挫折する欲求をもっていること」である。3.欲求の充足や挫折は時間の経過によって割り引かれる。以下に、各章の概要を示す。

序章では、死が悪であるという議論の基礎として、関連する準備的な論点を整理した。その中で、特に福利の理論が果たす役割と、価値に関する必要な区別を明確化した。

第1章：死の悪のタイミング問題では、「死は死の当人にとっていつ悪いのか」というタイミング問題（timing problem）を取り上げた。まず「死が悪い時間はない」とする古代哲学者エピクロスの論証を明確にし、それに対する応答として既存の立場を整理した。次に「死は、あり得たはずの人生の良さを剝奪するために悪い」とする剝奪説とそれを時間に適用した時間版剝奪説を定式化した。この理論に基づく主要な応答として、「死後説（死は死後に悪い）」と「無時間説（死は無時間的に悪い）」があることを示し、その他の立場である融合時間説や同時説について検討し退けた。

第2章：剝奪説を退ける

本章では、剝奪説の主要な応答である死後説と無時間説が、いずれも問題を抱えた立場であることを示した。まず、死後説が私たちの日常的直観に照らして「自然な見解」であるという主張を検証し退けた。次に、死後説が死者の福利をゼロとする立場（ゼロ説）を前提としており、無時間説が死者の福利を無規定とする立場（無規定説）を前提としていることを明らかにした上で、ゼロ説と無規定説の双方の問題点を検証しそれぞれを退けた。さらに、ゼロ説または無規定説のどちらかが正しければ、剝奪説を擁護するのに十分であるという主張も退けた。

第3章：エピクロス主義を退ける

本章では、死は死の当人にとって悪ではないとするエピクロス主義が退けられた。エピクロス主義では、殺人が不正さをどのように説明するかが大きな課題となっているが、本章では、従来の応答を検討したのち、近年提出されたティム・ブルクハルトの論証を取り上げて、4つの問題点を指摘してこれを退けた。

第4章：生前説の構築

本章では、生前説をより精緻に定式化しその擁護を行った。まず、生前説が剝奪説の代替案として成立するためには、非比較型の定式化が必要であることを示した。その上で、非比較型の定式化によって、先回り（preemption）の問題や死への態度に関する問題を適切に解決できることを論じた。また、非比較型の定式化の最大の難点とされる「有したはずの欲求」の問題についても、具体的な解決策を提示した。

第5章：生前説と時間的福利の問題

本章では、生前説が時間的福利を適切に説明できないとする批判に応答した。まず、時間的福利については「瞬間的福利」「スーパーヴィニエンス原理」「内在主義」の三つの原則を満たす必要があることを確認し、既存の応答がこれらと両立していないことを示した。その上で、「主体Sが挫折する欲求をもっていること」を価値原子とするという新しい立場を提案し、この立場が三つの原則全てと両立することを論じた。

第6章：生前説と変化する欲求の問題

本章では、過去の欲求と現在の欲求が矛盾する場合に、過去の欲求をどのように評価するべきかという「変化する欲求の問題」に対処した。問題を整理した後、時間バイアスによる解決、人段階による解決、人生全体の福利と残りの人生の福利の区別による解決策を検討し退けた。次に、欲求と充足の時間差に応じて福利を割り引く「時間割引」のアプローチを提案し、予想される反論から擁護した。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　佐々木　涉　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	森田　邦久
	副 査　教授	村上　靖彦
	副 査　学外委員	吉沢　文武（一橋大学大学院社会学研究科・社会学部/講師）

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、「死がいつ悪いのか」という分析形而上学において盛んに議論されているトピック（死のタイミング問題）において「死が悪いのは死ぬ前においてである」という生前説という立場を擁護するものである。「死がいつ悪いのか」を論じるためには「死がなぜ悪いのか」を論じなければならず、「死がなぜ悪いのか」を論じるためには「人にとってある出来事が＜悪い＞とはどういうことか」というより広いウェルビーイングに関わる議論をしなければならない。それゆえ、当研究は単に分析形而上学という枠で盛んに議論されているトピックであるということにとどまらず、より良い社会の実現にとっても重要な論点を含んでいるものである。

第１章では、「何かが悪いとすればそれは特定の時間において悪い」という前提と「死が悪い時間はない」という２つの前提から「死は悪くない」という結論を導く「死の悪のタイミング論証」と呼ばれる、死のタイミング問題を論じる際に共通の出発点となる議論を正確に定式化し、標準的な立場である剝奪説の応答とありうる選択肢を確認する。第２章では、剝奪説の最も有望な立場である死後説と無時間説を退ける。死後説も無時間説も、すでに多くの批判とそれへの応答がなされているが、そうした膨大な先行研究を丁寧に検討し、著者自らのオリジナルな提案もなされている。第３章では、死が悪ではないというエピクロス主義を退ける。「死が悪ではない」という結論からは「殺人は悪くない」という結論が導かれるはずだが、明らかに反直観的である。それゆえ、エピクロス主義者たちは様々な議論で殺人の不正さとエピクロス主義が両立することを示そうとするが、これらがいずれも失敗していることを丁寧に論証する。たとえば、エピクロス主義が間違っている可能性から殺人をとどまることの正当性を論じるブルクハルトの議論に対して、結局エピクロス主義と殺人の不正性との両立が論証できていない、エピクロス主義の実践的な意義がなくなる、などといった多角的な視点から批判した。

ここまでで本研究が擁護する生前説に対立する議論を反証したので、第４章以降では、生前説のメリットを明らかにし、生前説に対してこれまで提起された批判への応答を試みる。第４章では、生前説を正確に定式化し、これが剝奪説とは異なる理論であることを鮮明にする。また、生前説は基本的に欲求充足説と呼ばれる福利の理論を前提にすることが多いが、第５章と第６章では、死の哲学に限定しない、欲求充足説に対して提起される代表的な批判、すなわち時間的福利の問題と変化する欲求の問題に対処する。そのことにより、生前説も説得力を持つことになる。特に第５章では、特定の時点や期間において人がどれほど良い状態あるいは悪い状態にあったかを示す時間的福利の問題について、すでに提案されている様々な議論を整理し検討し、ピッチャー主義と著者が呼ぶ立場を発展させたオリジナルな時間的福利の理論を提出するが、これは十分な新奇性が認められる。最後に第６章では、ある欲求が消滅し新たな欲求が生じたとき、新しい欲求の代わりに消滅した欲求を充足することは（たとえそれが新しい欲求よりも強いものであっても）直観的に言って人の福利を高めないように思える。だが、同時に消滅した欲求でも（たとえば遺言の実行など）それが充足されることは福利を高めるように思える。この２つの直観をどう調停するかを議論する。著者の提案はまだ吟味する点が残されているとはいえ、この論争に新しい光を与えうるものだと評価できる。

以上のように、丁寧な先行研究の分析、検討と、緻密でロジカルな議論によって得られた成果は、死の哲学のみならず、広く関連する諸分野、特にウェルビーイングという人間科学研究科における多くの研究分野でも重要な位置を占めている概念の明確化にも貢献しうるものと評価できる。審査の結果、本論文は博士（人間科学）の学位を授与するに相応しいと判定した。